

**右京区基本計画策定委員会**  
**第2回 豊かな自然と歴史文化のまちづくり部会 摘録**

日 時： 平成21年7月25日（土）  
午前10時～正午  
場 所： 右京区役所5階大会議室1  
出席者： 神吉部会長 ・ 岩澤委員  
奥田委員 ・ 久保委員  
森委員 ・ 新妻委員

### **地域の景観の維持管理**

---

- 身近な空間の清掃活動が盛んであること等について意見が出されているが、今後も、続けていけるかが心配。評価することが必要では。新しくこられた住民にも「そういう活動が盛んな地域なのだ」ということを感じ取ってもらいたい。個人レベルの取組は各人でできるが、もう少し活動範囲が広がると、意識的に活動を展開していく必要がある。しかも、自然なかたちで楽しむような感覚で取り組むことができ、そういった暮らしの良さをアピールできないか。
- 地域の取組で半ば義務的にやっているものもあるが、そういった当たり前の清掃などの取組を当番制にすることは必ずしも適切でない。取組が地域に任せると、時間に余裕のある人などに負担が集中する。また、取組への参加の多少などから、地域内で摩擦も発生する。ただ、これまで関わりがない人を呼び込むきっかけはほしい。取り組み始めると、がぜん頑張ってくれる人もいる。
- 自然なかたちで取り組まないと、長続きしない。強制的な取組にするのではなく、楽しみながら取り組んでいくことができるようにならないか。こういったことは続けていく労力が大変であるし、また、そういったことについて広く知ってもらうことも必要である。

### **人と自然の共存**

---

- 猿や鹿、猪などによる獣害が、京北地域からさらにまちなかにまで広がってきている。自然豊かな地域であるほど悩みを抱えている。
- 京北で、熊を保護しようとする団体が、山を購入し保護区域を広げる運動を展開している。今後どのような動きになるのか気になる。熊は木や電柱にも登るので、被害を防ぐことが難しい。
- 熊が人里に下りてくる理由として、生息環境の悪化にあると考える人は保護区域をつくらうとしている。ただ、急に環境を変えていくことは難しい。徐々に解決していく必要がある。ドングリの木を植林してもすぐには育たない。獣害に関しては、専門家による研究が必要である。

### **農林業の振興**

---

- 新たに農業を始めたい人にとって、農地は何反ほど必要になるのか。広沢辺りであれば、土地も高いのではないか。
- 新たに農業を始めようとする人が農地を取得しようとしても、様々な法的規制があり、簡単には取得できない。

- 南丹市では、一反からでも購入できるような取組もあるようだ。
- 林地は、30坪でも購入できる。
- 減反による遊休地はどの程度あるのか。ただ、最近では手入れされていない農地も減っているようには見える。林地であっても、うまく整備すればそれなりに農地として活用できる。果樹園などにも活用できる。
- 林業だけでは生活が成り立たない。山を持っている人も、3～4代前の先祖が植えた木が大きくなり、それが財産になっている。しかも、狭い土地だとうまく育たない。今後、自然を守っていくのであれば、生産や資力についても合わせて守っていかねばならない。そして、長い目で30年後のことを考えることも大切。森林を維持するには、人の力も必要。まちなかの人にしば刈りや枝打ちは無理。農業にも共通する悩みでは。
- 新しく取り組みたい人には勉強の時間も必要。初めはうまくできないかもしれないが、やりたい気持ちがある人が頑張れば、できるようになる。年を取って自分ではできない人が指導して、若い人が動いて回していかねばならない。大切なのは、人と自然をうまく回していくこと。今の世界は、経済ばかり回すことを考え過ぎ。人と自然を回して将来の姿をイメージする発想を持つべき。以前の「不便」な生活は全てが不幸というわけではなかった。
- 林業のサイクルは長いので、最後までやり遂げることを念頭に置かねばならない。
- 小さい頃から自然に触れることが大切。
- 1～2反の農地を持つ人は、たくさん農地を持つ人に管理を委託することで、農地を守ることも考えられるのでは。問題は、93%を占める林業。

## 個性ある景観づくり

---

- 自然を壊すのではないが、基幹的な交通があることで、人や物を循環させる夢も膨らむ。
- 山に作業道を整備すると、私有地に入ってきた人たちは口々に「このような道をつくるから山が荒れる」と言う。来訪者と地元住民とのギャップは大きい。道路にしても同じ。来訪者は、高雄のつづら折れの道の評価するが、住民からすれば有りがたいものではない。そのギャップをどこまで我慢して互いに歩み寄れるかがカギになるのではないか。
- 市の景観政策の面からのアプローチも大切ではないか。
- 景観を守るためのルールは必要だと思う。ただ、同じような建物が整然と並ぶのか、ある程度の間隔や、ゆるやかなまとまりが感じられるような景観が良いのかについては、考える余地がある。
- 豊かな自然を感じる事が難しい地域もある。
- まちなかの状況は遅きに失した感がある。30年前によく考えていけば、現在のようににはならなかったのではないか。
- まちなかには公園は少ないかもしれないが、寺社が多い。今ある資源を活かし、これから作り出していくのであれば、住民サイドで十分意識して、例えば大きな面積の土地の利用変更が生まれそうであれば、地域の環境にも寄与するように、行政に働きかけていくことが重要。住民の意思がなければ、行政は動かない。
- 景観を守るためには、ボランティア的な取組では限界がある。もっと抜本的に手をつけなければ苦しい。
- 景観を取り繕うためにやろうとすると取組自体に無理が生じる。生活と繋がったところで取り

組んでいく必要がある。物事には良い時期と悪い時期がある。今は悪い時期なので取組を縮小せざるを得ないが、将来の良い時期に、改めて再開の決断ができるようにしておくようなことも考えてみる必要がある。好不況の波をうまく受け止める仕組みが必要である。

- 伝統産業を守っていくのも、利益やゆとりが必要である。

## 担い手・次世代育成

---

- 生活が便利になり、若い世代の目は都市に向かう。
- 右京区は、物をつくって都市で消費する、人を育て、人もうまく回すことができる地域になっている。
- 今、小学生くらいの子どもが、30年後には地域の担い手になっている。
- 地域の良さを子どもの世代が知ること、次世代につなげていける。例えば、右京区内の小学校給食には区内の産品を使い、生産者が生産に関連する情報を伝達し、学習の要素も加える。
- 小学生が頑張っていて、大人が知らん顔している現状は無視できない。ただ、景気・経済にゆとりがない。学校のスタッフ・PTAは頑張っている。
- 親の世代を巻き込むのは簡単ではないが、もう少し注目が集まるようにせねばならない。
- 小・中学校で職業体験を行うが、高校で途切れ、大学で将来に悩む状況がある。小学校では地元との繋がりが強く、中学校で範囲が広くなり均質化され、高校・大学ではそれが顕著になる。例えば、右京区全体で、小学校で取り組んだ職業体験に中学・高校と連続性をもって関わりをもつことができないか。30年後には地域の担い手に育っているはず。ボランティアで林業・農業に携わりたいと考える人はいる。ここから一歩踏み込むには、それなりのリターンが必要である。

## 地産地消・循環型社会

---

- 他地域で農産物のブランド化が進んでいるが、右京でもそのようなことができないか。
- 定着すると地域の信用が生まれ、長続きするのでは。専業でやっていた農家には、後継者も戻ってくる。販路を考えることも大切。農業のプロでも、マーケティングは別の課題だ。右京でも、産品の質の良さを訴えるなど、効果的な取組ができないか。
- 農業は地産地消のイメージができるが、林業は難しいかもしれない。強みと弱みを活用した取組ができないか。
- 京北の木材100%で家を作ることが可能。京北では、様々な形状の木が揃う。京北の80年もの木材は目も細かく強い。構造材には最適。
- この地域の木材は高いと思われるが、質が高く、値段に見合った価値があり、100年は持つ。値段的にうまく建てることができれば、一般的に流通する木材とそれほど変わらない価格で建てられるのでは。
- 「京北の木材で家をつくったら、こんな感じ」といったモデルができないか。都心部の町家だけでなく、郊外のかっこいい戸建住宅のイメージも狙っていけないか。
- 今の生活スタイルをいかに変えていくのが重要である。